

候。

一、大丹生より福居へ道程五里。惣て上邊への往還路にて、是より方々へ別れ申候。此五里の内にかり・五丈土と申所有之候。是より大ぬけ仕候得共、如何様に成居申候哉、いまだ見申者無之由。今度雨乞仕候者、越智山の麓尼が谷ふしやうと申池にて雨乞仕候。其神の御とがめと所々にて咄申候。越智山の前立に何佛にて候哉、右池の上に簀子をかき据置雨乞仕候へば、いつも雨降申候處、今年は降不申候故、此池の内へ打込候へば俄に其所ぐれんの如くに罷成、瀉し候様に大雨降出、此所にて數十人死申由に相聞申候。又池の主は馬の鞍に候處、是を打破候故共申候。

但右往還五里の間、此度の大變にていまだ道筋付不申候故、福居より川尻迄、八里許廻り候て通路仕候。

一、賀茂

一、くみ崎

一、上大見

此所不殘流申旨。法雲寺と申寺、少し高所に有之候へ共、後の小山不殘崩出、堂内へ土石流込、庫裡

此二ヶ所海の際にて、様子相知不申候。

は推潰候得共、寶物は住持不殘取出、鐘樓堂へ上置候。
一、うみ 家百軒許有之。在所の内に小川有之、二十五軒流。其外何も損申候。二十五人死候由。
一、玉川 家八十軒許の所六十軒流、二十人許死申候。
一、ぬか 此所の様子は不相知候由。
一、かぶらき 家六十軒許の所、二十軒流候由。
一、いくら 越前にて三崎と申候。家五十軒許の所不殘流、漸四五軒殘候得共、未掘出不申候由。
一、奥ぬき 家百軒許有之候處、五十軒流申候。し、新保と申近所の由。此所に眞成寺と申西派の御坊有之候。八間四面の堂不殘潰れ、家内十三人溺死候由。
右大丹生より何野迄、二日許も懸り候はゞ可參様に申候。惣て路無之、所々少し充船にて通路仕候由。
一、丹後宮津 家四百軒許流申候由。玉川迄船にて參候刻、玉川屋八左衛門と申者咄申候。
一、若狭小濱 惣体不殘水着申候。水深さ壹丈許、地形高き所は五尺許、青き泥水にて候。米藏へ着申所下はへ三重宛着申候。此濡米五斗五升俵、六匁三分に買、海の内塩

水に漬置申候由。是は惡水の匂を去り申爲め由。味噌・塩等に難儀仕り惣て食事等は、小濱の脇に八軒許水着不申所有之、何も此所へ參候由。鍋釜等泥の内に有之掘出申由。御城中も損申由。隅矢倉石垣かたむき損申候。御家老の家一軒は、不殘損壞仕候由。
右小濱の儀は、越前三國より參候船頭咄申候。此船頭見申時分はいまだ水引不申、武士家・町屋共損亡・死人等の儀は、不存候由申候。

右見分仕候様子、並所の者物語仕候趣、覺書に仕上之申候。以上。

七月十一日

蛭川屋 孫六

○ 江戸表にて回狀の寫

六月二十一日より二十三日迄、酒井備後守殿領分若狭小濱、牧野河内守殿領分丹後田邊、稻葉内匠頭殿領分城州淀、西國の内、右の領分風雨甚強、川々洪水、堤等押切城内城下並百姓町人家々へ水押込、古來無之大水にて、三日或は四日水引不申、其内は無食にて漸水引、無是非米藏の錠等

ねぢ切り、米を嚙水を飲候て饑を凌ぎ申候。古來無之事共故、兼ての心得も無之、用心船も不差置、難澁至極に及候。今以て飛脚の往來も漸に仕候由。破損の所々、其外怪敷事共も多く有之休に候へ共、水引切不申候故知れ不申候。尤知行所は皆無と見申候。右三ヶ所の領分破損等有増申來候得共、夥敷事故難盡筆紙候。此外西國方右同日風雨強候處、別て但馬國邊同斷の趣に申來候。以上。

七月十一日

一、冷泉大納言の秀歌

今茲の夏武家傳奏冷泉前大納言、關東下向の節富士の詠、及び濱松の驛にての歌、近世の秀逸のよし、京師より云來。

富士

動きなき山はふじの根すなほなる神代の儘の姿ながらに

濱松

種まきし誰が世のふたば蔭ふりてこゝに名高き濱松の里
一、米價下直に付御書立

近年米價は次第に下直、諸物のみ追日高直にて、士家・農業のもの商買は、富家のみ日々宜敷、末々は却て及困窮候由。